

松浦 里彩 提出 学位申請論文

『柿右衛門様式研究―文様と構図の分析を中心に―』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、十七世紀後期の延宝期を中心に制作された肥前磁器について、主に絵付けにおける文様と構図の分析を通じて、その構成要素や成立背景を明らかにすることを目的としている。その主軸となる作例が、「色絵双鳥松竹梅文輪花皿」（佐賀県立九州陶磁文化館蔵）他である。白くなめらかな素地に、赤や青、緑、黄の明るい色彩と繊細な線描で絵付けを施し、白い素地の見える範囲が広い、いわゆる「余白」をとる構図を用いた点が特徴的である。このような作品の多くは主に輸出製品として制作され、素地の美しさや独特の文様が王侯貴族に愛されると共に、海外の製陶文化にも様々な影響を与えた。

従来の肥前磁器研究は、生産地や消費地、編年の分析など考古学的手法に重

点が置かれ、文様の描法や構図の構成といった絵付けに関する緻密な分析は、長く課題とされてきた。このような研究史の中で、本論文の検討内容は、作品が持つ要素や需要の要因などを明らかにするだけではなく、生産窯の特定や編年分析への応用も期待できることから、肥前磁器研究に新たな要素を加えることが可能であると考ええる。

この「色絵双鳥松竹梅文輪花皿」を含む一連の作品は、従来、「柿右衛門様式」と称され分類されてきた。しかし、そもそも「柿右衛門様式」という捉え方は、後世の枠組みであり、延宝期を中心とした肥前磁器の絵付けや造形の傾向を、一つの様式として捉えようとした結果、生じた概念とも言える。柿右衛門様式に関する研究が特に活発になったのは大正期に入ってから、さらに様式概念として唱えられるようになったのは昭和期半ば頃のことと、その定義や概念は研究者によっても捉え方が異なり、いまだ曖昧な点も多く残されているのが実情である。

そこで、本論文ではまず柿右衛門様式に関する研究史を整理し、その問題点

を抽出した上で、十七世紀の肥前磁器の絵付けの分析に取り組んでいる。具体的には、これまで詳細な検討が行われていない「文様」表現に注目し、形態や色彩などの描法の分類を試みた。併せて文様の配置にも着目し、とくに延宝期の肥前磁器や柿右衛門様式の特徴とされる、いわゆる「余白」のある構図の成立過程についても整理を進めた。重ねて同時代の絵画のほか、和鏡、小袖、漆芸などの工芸品も交えて比較検討を行い、モチーフの選択や構図構成の着想源についても、その傾向を明らかにしている。

これらの磁器群は、そもそも朝鮮や中国といったアジア諸国の技術を土台として誕生したが、次第に日本独自のスタイルを確立し、西欧の陶磁器文化にも大きな影響を与えるに至った。延宝期に制作された肥前磁器やそこにみられる絵付けが、西欧でこれほどまでに需要を高めた経緯には、どのような時代背景があり、またどのような要素が求められたのかという点にも留意し、具体的な事例を交えて輸出を介した需要の様相を示している。

なお、本論文の各章の組み立ては次のとおりである。第一章では、延宝期を

中心とする十七世紀後期の肥前磁器をとりあげるにあたり、まず、主に延宝期の作風を代表する柿右衛門様式に関して、これまでの研究史を整理し、そこにみられる問題点やそのあり方の現状を確認した。また、柿右衛門様式の特徴のひとつとされる、なめらかな白い素地をさす、「濁手」という用語についても、その成り立ちを追った。

第二章では、十七世紀後期の肥前磁器の絵付けについて、①肥前磁器の赤絵創始者と創始時期、②延宝期の作風とその形成期、③延宝期の絵付けの構成要素、以上の三点から検討した。その結果、①史料に基づく、日本における赤絵創始の最古の記述は初代酒井田柿右衛門であり、その成立年代は一六四〇年代であること、②制作年代を推測できる作例から考察すると、延宝期にみられる作風の形成期は一六八〇年代頃と推定できること、③従来の研究史では、延宝期を中心とした絵付けの構成要素は、濁手素地、繊細な輪郭線、明るい色彩による文様の表現、左右非対称で「余白」を多くとる「絵画的」な意匠構成に着眼点が置かれていること、以上の三つの事柄を結論づけた。

第三章では、前章までの内容を踏まえ、本論文の核となる文様の分析を行っている。具体的には、四千点を超す近世の肥前磁器の伝世品から、十七世紀に顕著にみられる文様として、松、竹、梅、鳥、菊、蝶、柴垣の七種類を選択し、さらにモチーフごとに基準を設けて分類した。まずは時代の推移に伴う変化についても分析を行い、そこから延宝期特有の文様表現を抽出した。その結果、延宝期の文様は特に梅花の描き方に特徴があることを明らかにした。なお、その分析結果を、柿右衛門古窯からの出土陶片にみられる梅文様のトレースと照合したところ、この窯跡からは同系統の文様を施した作は出土されておらず、特徴的な梅文様の作例は、異なる窯で制作されていた可能性が高いことが確認された。ほかにもこの時期に好んで使用された鶉文様を取り上げ、絵画作品との比較を通じて、延宝期の肥前磁器におけるモチーフの選択や表現の特徴についても考察した。その結果、本論文で導き出した文様分析の成果は、個々の作品の生産窯や制作年代の特定にも活用できる可能性が見いだせた。

第四章では、前章の文様の分析結果を用いて、十七世紀後期を中心とした肥

前磁器における構図について、文様の配置から分析し、その構成要素と成立背景を論じている。その結果、延宝期に特徴的な、白素地の見える範囲の広い構図が成立するまでの変遷が明らかとなったことは、大きな成果であった。また、同時代の絵画や他の工芸作品に関しても構図の変遷を辿った結果、磁器と同じ傾向がみられることを確認した。特に、皿の形状と類似する和鏡に、延宝期の肥前磁器と共通する図様を見出すことができたことは興味深い。

第五章では、前掲の「色絵双鳥松竹梅文輪花皿」と、類例品の「色絵柴垣松竹梅鳥文輪花皿」（個人蔵）を対象に分析を進め、改めて延宝期の肥前磁器の絵付けの特質を考察している。また、西欧での収集の歴史や模倣例など、海外における肥前磁器の展開に着目した結果、柴垣文様や梅鶉といった特定のモチーフの組み合わせに高い需要が認められることなどを提示するに至った。重ねて、十九世紀後半にフランスで制作されたセルヴィス・ルソーの陶磁器の特徴である、花鳥文様を主とし、白素地をみせるようにモチーフを配置する構図にも、柿右衛門様式の影響がうかがえることを指摘している。

以上、本論文では、十七世紀後期の延宝期を中心に制作された肥前磁器にみられる絵付けについて、文様と構図の観点から分析し、国内外での影響や需要の考察も加え、その構成要素や成立背景を明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、松浦氏の十余年にわたる研究成果を盛り込んだ意欲作である。国内における調査はもちろん、二〇一八年にはオーストリアの古城における陶片の実地調査も体験するなど、国内外におけるフィールドワークの成果もその知見に盛り込まれている。日本の陶磁器の色彩表現が飛躍的に豊かになった近世初期、中でも延宝期（一六七三〜八一）には、「濁手」と称される乳白色の素地に繊細な上絵付けを施した作品群が制作され、その多くが西欧諸国に輸出された。これらの作品を総じて「柿右衛門」と称するようになるのは、『柿右衛門と色鍋島』（彩壺会、一九一六年）の著者、大河内正敏氏を筆頭に、近代以降の

研究者の提言によるものであった。その後の「柿右衛門」研究は、現在まで続く酒井田柿右衛門家の活動といかに関連付けるかという課題も加わり、いささか概念的であったと言える。考古学の方面からの研究成果により、昭和五十年代以降はこれらの産地や編年がより明らかになり、染付の有無などによって狭義、広義の柿右衛門様式などに分類されるようになった。その一方で、文様の検討など美術史的な観点からのアプローチは立ち遅れていたため、「絵付け」の分析を軸にその特質を論じた松浦氏の着眼点は、研究者として優れたものであると言えよう。

本論文において、査読者の評価が特に高かった事項は、① 四千点を超える肥前磁器を対象とした緻密なモチーフの分析、② 十七世紀中期から末期の肥前磁器に顕著な構図の変化の指摘、③ 和鏡、漆芸、染織など他分野の工芸への成果の活用性、の三項目である。中でも特筆すべきは、本研究の要ともなる三章におけるモチーフの詳細な分析である。松浦氏は四千点を超える膨大な量の近世の肥前磁器を対象に、延宝期特有の表現を示すと思われる、松、竹、梅、菊、鳥、

蝶、柴垣の七つのモチーフを選択し、色彩や形態などの細部の変化に沿ってこれらを四六種類に分類した。その結果、正保期から元禄期にかけて同じモチーフでも明らかに描写が変化していること、延宝期を境に登場する文様表現があること、寛文期から延宝期にかけて大胆な構図の変化がみられることなどを指摘した。これまでにない文様表現の具体的な事例を示し、肥前磁器の生産窯や編年の特定に関わる複数の事項を明らかにするに至ったのは、今回の松浦氏の大きな功績である。

長期にわたり黙々と、モチーフごとの詳細な検討、分類を進めた松浦氏の熱意と、そこから一定の成果を導き出した事実を何より高く評価したい。考古学の成果によって、工芸作品の中でも陶磁器の編年はある程度規定されているため、この度の成果は、和鏡、漆芸、染織といった、他の工芸品の制作年代の推定にも応用される可能性を秘めている。

最終章で示された「柴垣」などの日本らしいモチーフが、目新しい文様として西欧の陶磁器に多く転用されたという事例も、大変興味深いものである。

十九世紀の西欧に起こるジャポニスムの事例では、セルヴィス・ルソーやセルヴィス・ランベールといった、当時のパリ万博に出品された西欧産の製品に、浮世絵などの日本の絵画から図案を転用した例が知られている。加えて、植物や鳥、昆虫などの花鳥文様を主とし、白素地をみせるかのようにアシンメトリーにモチーフを配置するその構図には、西欧に渡った「柿右衛門様式」の磁器からの影響が推測される、との今回の指摘も意義深い。

一方で、西欧諸国との貿易の問題を交えた交流史に関しては、示唆的な表現がなされているものの、まだ様々な観点から検討する必要がある。学力確認の試験の際にも、担当者から「ハイブリッドな器」という表現が示されたように、いわゆる柿右衛門様式は日本で育まれた美意識を素地に、輸出先の西欧の美意識を直接的に反映した、当時としては稀有な作例であると言えよう。だからこそ、日本に先駆けて西欧諸国に陶磁器を輸出していた中国や、主要な依頼主の西欧諸国との関わりを常に視野に入れて論じるべきである。

従来の研究史では、一六五〇年代以降に開発された「濁手」は柿右衛門様式

に必須の要件とされているが、これは白素地に拘りのある西洋の好みに沿って開発されたものと考えられ、それゆえに西洋への輸出が途絶えたと、国内での生産も減少したことが予想される。その乳白色の素地の名称も、近年の研究では「milky-white」と称されたとされているが、実際に当時の西欧で「濁手」は何と呼ばれていたのかと言うことも、いつか明らかにすべき問題である。またわずかに伝わる国内の伝世品に関しても、花鳥表現がどのように行われ、いかに評価されてきたのかを緻密に論じれば、十七、十八世紀の東西文化の比較がより的確に行えるであろう。これらの東西交流史の観点は、ひいては柿右衛門様式の成熟、成立過程の経緯をより明らかにする、重要な鍵になることが期待される。

以上の検討すべき課題は残されているが、色絵の転換期ともなる十七世紀後期の肥前磁器について、これまで欠けていた美術史的なアプローチを用いて、実直に、かつ緻密な研究を重ね、一定の成果を上げたことは評価に値する。従来の研究史でいわば定番化した「柿右衛門様式」という用語に、執筆者自身が未だ囚われているように感じる箇所も一部に見出されるが、本論をまとめたこと

で生じた新たな課題に向かいながら、今後もより広い視野で自身の知見を発信することを期待する。特に、今回の論文で示した絵付けの分析結果やその方法論が、陶磁器のみならず、他の工芸品に対しても制作年代などを推定する素材となりうることは、学際的な研究が求められる中で、極めて重要であると考え

る。
以上、本論文の提出者松浦里彩は、博士（歴史）の学位を授与される資格があると認める。

令和元年十二月十八日

主査	國學院大學教授	藤澤紫	Ⓜ
副査	國學院大學教授	小池寿子	Ⓜ
副査	学習院大学教授	荒川正明	Ⓜ

松浦 里彩 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（歴史学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和元年十二月十八日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	藤澤紫	⑩
副査	國學院大學教授	小池寿子	⑩
副査	学習院大學教授	荒川正明	⑩